

死刑廃止国際条約の批准を求める

VOL.121

頒価 300 円

# FORUM90

## 地球が決めた死刑廃止

2012年1月20日発行  
フォーラム90実行委員会  
〒107-0052 東京都港区赤坂2-14-13  
港合同法律事務所気付  
TEL: 03-3585-2331  
FAX: 03-3585-2330  
振替口座: 郵便振替 00180-1-80456  
加入者名: フォーラム90

### 主要目次

執行停止をどこまでも! 1頁  
世界人権デーの全国一斉ビラ撒き行動について永井迅 3頁  
全国各地のビラ撒き報告 4頁  
「死刑廃止についての議論を開始し、死刑執行の停止を求める緊急アピール」発表について松浦亮輔 5頁  
「死刑の映画」は「命の映画」だ 可知亮 6頁  
死刑はそれでも必要なのか——3・11の奈落からかんがえる 辺見庸 8頁  
「死刑日録」 14頁

## 執行停止をどこまでも!

はらはらしながら迎えた年末、死刑の執行は回避され、19年ぶりの死刑執行ゼロの年を実現させることができた。私たちはこのことを素直に喜ぶと共に、2010年7月28日のあの千葉景子法相の執行から17カ月に及ぶ執行停止期間をさらに延長させ、実質的な死刑廃止国へ近づけるための努力を続けたいと思う。しかしそのことを私たちは楽観的に展望しているわけではない。

2011年を死刑執行ゼロの年にするために、フォーラムをはじめ全国の死刑廃止運動がさまざまな活動をしてきた。

時系列で12月の行動を記録しておきたい。

- 1日 早朝から小雨のなか、法務省前ビラ撒き
- 2日 衆議院議員会館で院内集会 法務省刑事局、

矯正局の4名との質疑応答など

9日 弁護士会館2階クレオでの日弁連「死刑を考える日」映画「ハーモニー」上映会でビラ、ニュース配布

10日 世界人権デー全国一斉ビラ撒き(報告3頁)

11日 中国新聞山口版に意見広告を掲載(この広告掲載にあたって中国新聞から冒頭の文章「一連のオウム事件被告への死刑判決が確定することなどから死刑の執行を求める声があります」の部分は、係争中の裁判への意見広告は差し控えてもらっている、つづいて平岡秀夫、菅家利和、久間三千年という固有名詞は困る、責任者名と電話番号を入れてくれなど、いくつもの規制と圧力があつたが、結局別掲のような形で12月11日に掲載された。また後日法相に直接掲載紙も届けた。

### 死刑映画週間

## 「死刑の映画」は「命の映画」だ

2012年2月4日(土)～2月10日(金) 東京渋谷 ユーロスペース

犯罪や、その結果としての死刑という処罰方法は、私たちの日常と遠くかけ離れたものだろうか?

世界じゅうの映画監督や作家が、犯罪や死刑をテーマに優れた作品を創造してきているのは、

それがけっこう、社会が抱える身近な問題だからではないだろうか。

『私たちの幸せな時間』(ソン・ヘソン 2006) × 雨宮処凛

『真幸くあらば』(御徒町颯 2010) × 小嵐九八郎

『エロス+虐殺』(吉田喜重 1970) × 吉田喜重

『帝銀事件 死刑囚』(熊井啓 1964)

『BOX 袴田事件 命とは』(高橋伴明 2010) × 森 達也

『絞死刑』(大島渚 1968) × 足立正生

『サルバドールの朝』(マヌエル・ウエルガ 2006) × 佐藤 優

『ダンサー・イン・ザ・ダーク』(ラース・フォン・トリアー 2000)

『ライファーズ』(坂上香 2004)

『休暇』(門井肇 2008) × 香山リカ (トークは一回限り、7ページ参照)

前売り券は2月3日までユーロスペースにて発売中。フォーラムでは扱いません。1回券 1000円、3回券 2800円、5回券 4500円。ユーロスペースのチケット販売窓口で「フォーラム90の会員です」と言うと1100円に割引になります。



©2009「真幸くあらば」製作委員会

11日 京都死刑廃止にんじんの会集会「罪と罰を超えて」でフォーラム・ニュース、ビラ配布

13日 CPR呼びかけによる「死刑廃止についての議論を開始し、死刑執行の停止を求める緊急アピール」記者会見（報告5頁、29日のNHK昼のニュースで2011年執行ゼロが報道され、この会見の映像が流れた）

15日 早朝から法務省前ビラ撒き

16日 衆議院議員会館で院内集会。韓国から李永雨神父、朴秉植東国大学教授を招き、「14年間執行のない国・韓国」と題して講演していただく。私たちが、加害者の更生のみならず被害者のケアも同時に進める韓国の経験から学べることは少なくない。また1990年代に1審死刑判決は219件だったのが、執行停止後の2000年代の10年間では73件になっていることなども紹介された。この日の講演内容はなんらかの形で広く伝えたいと計画している。

また、二人は集会後に平岡法務大臣を表敬訪問し、約70分間にわたって、集会で報告された韓国の死刑を巡る状況に加えて、膨大な数の民間のボランティアが共生のための矯正・保護を目指して刑務所の矯正教育を担っている様子等を紹介した。

このほかフォーラム、アムネスティによる法相宛の要請ハガキや、岩国在住の方々による地元事務所への要請、さまざまな形をとっての法相本人への働きかけなど、これまでに動く動き回った。

こうした行動のほか、足利事件、布川事件などの冤罪事件の再審無罪確定や、袴田事件、名張毒ぶどう酒事件、狭山事件、東電OL殺人事件、福井女子中学生殺人事件などの冤罪事件の証拠開示が進行したこと、国策捜査による検察への批判が一定程度高まっていることなど、司法への信頼度が損なわれていることも、執行停止への底流にあっ

#### 平岡法相就任から11月末まで

9月2日 平岡秀夫衆議院議員が法相に。就任時の会見で法相が死刑執行に慎重な姿勢を示す。産経新聞は「法相は職責から逃げるな」、自民党河井衆議院議員が予算委員会で死刑を執行せよと迫る

9月29日 フォーラム・ニュース119号に法相宛要請ハガキを入れ発送

10月5日 フォーラムはアムネスティ、監獄人権センターと共に法相に面談、「死刑執行を執行を停止し、死刑廃止に向けた共同要望書」を手渡す。（この後、31団体が賛同団体に）

10月6日 日弁連人権大会でニュース配布

10月8日 響かせあおう死刑廃止の声2011（牛込筆筈区民ホール）600名参加

10月17日 在岩国の市民や宗教者が「平岡法務大臣様死刑執行をやめてください」と申し入れ

10月26日 藤村修官房長官が「野田内閣には死刑を廃止する方針はまったくない」と表明し法相を批判

10月28日 フォーラム、アムネスティ、宗教者ネット、死刑廃止を求める市民の会、監獄人権センターは内閣総理大臣及び官房長官へ「抗議書」を提出

11月6日 法相の地元・山口県岩国市でビラ撒き後、フォーラム岩国と共に岩国市民会館小ホールで集会を持ち、法相地元事務所へ「死刑執行停止を求める要請」を手渡す

11月12～13日 大阪釜ヶ崎で死刑廃止全国合宿。2011年を執行ゼロにしようと話し合う

11月29日 フォーラム・ニュース120号に法相宛要請ハガキを入れ発送

たといえるだろう。

私たちは今年もさまざまな形で、死刑執行停止、死刑制度廃止への活動を展開していきたい。

その第1弾として2月4日から、死刑映画週間として渋谷ユーロスペースと組んで、10本の映画上映を行う。ぜひ参加していただきたい。(F)

意見広告

## 法務大臣！ 死刑執行をしないでください

死刑確定者が一三〇人になったことなどから、死刑の執行を求める声があがっています。しかし死刑の執行は、判決が確定したからといってベルトコンベアのように行われてよいのでしょうか。個々の死刑囚は誤判の可能性、不十分な裁判、高齢や疾病など、さまざまな問題を抱えています。あらゆる角度からそれぞれのケースを慎重に検討すれば、短期間で精査できるはずがありません。

再審無罪判決の出た足利事件と同じDNA鑑定が証拠となり死刑が確定した飯塚事件の方を処刑した法相がいました。車いすで歩けない七五歳の老囚の死刑執行命令を発した法相もいました。こんな間違いを犯してはなりません。

現法相はリベラルな思想をお持ちだと聞いております。あらゆる圧力に屈することなく、就任時におっしゃったように、議論を尽くさぬうちに死刑の執行をせぬようにお願いします。そして死刑執行停止・廃止へ向けての一步を踏み出して下さい。

世界の三分の二の国々は、すでに死刑制度を廃止しています。国連は総会決議で繰り返し死刑の執行停止を呼びかけています。アメリカでは死刑を廃止する州が次々と増えています。韓国では一四年間も死刑を執行していません。

法相の勇気ある決断をお願いします。

死刑廃止国際条約の批准を求める **FORUM90**  
〒107-0052 東京都港区赤坂2-14-13 港合同法律事務所気付  
責任者・安田好弘 03-3585-2331

## 世界人権デーの全国一斉ビラ撒き行動について

永井迅 (東京・そばの会)

日弁連の人権擁護大会(於・高松、10月6日)の後に、法相地元での岩国集会(11月6日)と、私の体力、財力には分不相応な遠征?が続いたこともあり、大阪での死刑廃止全国合宿(11月12~13日)はパスさせてもらった。

そしたら、その合宿の場で、「世界人権デー(12月10日)に全国一斉ビラまきをすることが決まったから……」と、どこでも配れるビラを作るよう言われた。「決まったから」と他人事のように言われたが、もちろん、決めた人たちがいるのである。具体的に提案した人がいて、同意した人がいて……(もしかしたら反対した人も少しはいたかもしれない)。ちょっと「空気」を読み違えると、提案したこと全てを提案者自らがやるしかなくなる作風の中で、提案した人は勇気があったと感心する。

それで「業務命令ですか?」と聞くこともせず、素直に「承知しました」と、何種類かビラの案を作り、各地の人たちに「自由に使ってください」と送信した。私は毎月1度、「死刑について考えてみませんか」というビラを東京・綾瀬駅前前で仲間たちと撒いているので、それを応用すれば、いくらでも作れるのだ。とはいえ、レイアウト・パターンが似てしまうのはご容赦願うしかない。各地でそれぞれオリジナルなものも様々に作られたことと思う。

★

東京では、有楽町マリオン前で午後2時から3時半まで行った。マリオン前というのは、何かと街頭情宣で有名な場所だが、私は初めてだ。行ってみれば、噂に聞いていたとおり、右翼が演説している。居並ぶ人の行列は宝くじを買うためのもの。待ちながら嫌でも演説が耳に入るという意味では、なるほど、街宣に絶好な場所なのかもしれない。道沿いに横断幕と幟を掲げたが規制も特になかった。ただし、ビラを受けとってくれる人はとても少ない。綾瀬のほうはまだましなぐらいだ。

右翼が死刑のことを話題にしはじめる。「死刑反対のビラを配っている皆さんがいますが……」挑発してきたら嫌だな、と思っていたら、「どうして死刑になるような犯罪を犯す若者が出てくるのか、教育が悪いからだ、日教組が悪いんだ」とすごい三段(飛び)論法でまとめている。

日比谷野音から流れてきた反原発のデモ隊が通過する。(この反原発の集会にも別働隊(?)の仲間たちがビラを配ってきたのだが、そこではもち

ろん、ほとんどの人が受けとってくれたそうだ。)

この日、東京では20名ほどの人が参加した。

それで配れたビラは400~500枚。このコスト・パフォーマンスをどう考えたらよいか……。



★

全国各地では、下記の地域でそれぞれ取り組んでくれたと聞く。

札幌/大宮/高崎/前橋/大阪/京都/和歌山/岡山/広島/高知/北九州/水俣/福岡……

多くの仲間たちが参加してくれたのは「合宿で決まったから」とばかりは言えないだろう。執行のない一年のために何かしら取り組みたい思いがあって、それが具体的に全国一斉ビラ撒きの形になったということだ。

結果として日本で執行のない一年が19年ぶりに実現した。何がそれをもたらしたか、様々な角度からの議論ができようが、つまるところ、「死刑」が人間社会で扱える刑罰ではないことへの反省と理解が人権感覚として高まっているのだと思っている。「根拠なき進歩史観」と批判されればそれまでだが、私などには、死刑はいずれ廃止されるものと思えてならない。何しろ、私が生まれてから半世紀以上、多少の「反動」の時間があったにせよ、世界で死刑はひたすら抑制、廃止され続けてきたのだから。このうね無用な犠牲者を出すことのないよう、死刑廃止を訴えていきたい。

## 全国各地のビラ撒き報告

### 札幌から

札幌では、12月10日午後5時から30分を目途に氷点下の裁判所前などで行いました。

時間帯が遅かったなので、すでに暗くなっており、寒さのせいで外を歩く人も少ないなど北海道らしい弱点を晒したので、今後の課題としておきます。

当日のアムネステイGの講演会と前週の袴田事件ビデオ上映会にも配布させてもらい、特に映画のほうは延べ200人の参加者に配布できました。

札幌は、これから各団体が集まって集会に向けて話し合います。(杜野うさぎ)

### 群馬から

9時50分から高崎駅西口において、大きな地声で元気よく「今日は、世界人権デーです。死刑のない世界にしたいと思います」と言いながらビラをまきました。

「人を殺した人間は、獄門にすべきだ。許せない。あんたの言うことは、理想論だ」と陰しい目つきの中年男性。「エッ!獄門?(今どき「獄門」という言葉を聞くことになるとは思いもよらなかった)そんな恐ろし

いこと言わんと、理想を求めましょうよ」と私。

11時から前橋駅北口でビラまき。

「世界人権宣言は学校で習った!」と言って笑顔で受けとった中高生が何人もいて、気分が若くなりました。学校の先生に感謝♡。

「このビラ、よく出来ていますねえ」と感動した中年女性がいました。色々な人々の反応に驚いたり、恒例のビラまきは深刻な内容にも関わらず、楽しいイベントでした。(益永陽子)

追記 両駅頭でのまき残りは、前橋近辺の住宅に投函し、300枚をまき切りました。

#### 埼玉から

12時ちょうどにJR大宮駅西口の到着し、そごうの前に陣取って「2011年を死刑執行のない年にしよう!」のビラをまき始めました。一緒にまく予定だったMさんが骨折入院してしまい、急ぎよ我が家の愛犬2匹を動員しました(彼らが死刑廃止論者なのは、言うまでもありません)。



「キヤーツ可愛い!」と犬に寄ってくる女性は、着せられたTシャツに「死刑はやめて!」の文字を見た途端、表情を変えて素通りしていきます。ざまー見ろとばかりに、13時半までに250枚ほどまいてきました。大宮駅西口は、自由な雰囲気があり定期的にやれると確信しました(写真は、駆けつけてくれたAさんが撮影してくれました)。(友野重雄)

#### 京都から

会のメンバーにビラまき行動への参加を呼びかけましたが、忙しい人が多く、3人+助っ人3人+若手2人で実施しました。

送られてきたビラの原案から2枚を選んで表裏にコピーし、小さい旗を掲げて、三条河原町でビラまきました。

京都といえば四条河原町が中心ですが、人出は多いものの受け取りが非常に悪いらしく、定期的にビラまきを行うグループは敬遠しているとか。

土曜日の午後、家族や友達と行き交う人は難しいことは考えたくないという感じで受け取りはよくなかったですが、中には「死刑?」と関心を示す人もありました。

ほかのビラまきと兼ねた京都アムネスティグループのメンバーが、いっときメガホンでアピールしてくれると、やはり関心を持たれやすいと感じました。

翌日に行った森達也さん浜井浩一さんの集会のビラも一緒に渡しました。

集会はとてもおもしろい内容でしたが、やはり参加者は少なめでした。

2011年は死刑執行がなく、19年ぶりにゼロになったことを驚くとともに、とても清々しい気持ちになったのですが、私たちが貢献できたとは思えません。

もっと影響力のある行動を目ざしたいものです。

(京都にんじんの会・大道寺ちはる)

#### 和歌山から

和歌山では、和歌山カレー事件のことで毎月ビラまきしているあおぞらの会として取り組んだ。助っ人も

合わせて6名。大阪に比べてビラの受け取りはいい。死刑いらんとマイクで言ったからなのか、手渡したビラのタイトルが『『オウム・麻原を死刑に』』と言うあなたへ』だったせいなのか、3人が受け取ったビラを返しに来た。自分は違うのだとの意志表示だと思う。まだ、「林眞須美さんは無実」の訴えの方が受け入れられていると感じた。



(あおぞらの会)

#### 岡山から

寒風吹く中、新しい助っ人と2人で、2種類用意したビラ300枚を2時間足らずでまき終わりました。今年2度目のビラまきでしたが、例によって家族連れや男性高齢者の受け取りは非常に悪かったです。しかし、積極的にビラを受け取りにきた若者がいたことには可能性を感じました。なお、若い助っ人からもっとポップなビラも考えたらとのアドバイスがあったことを申し添えます。(ハンドインハンド岡山 宇田川健次)

#### 広島から

5名で、正午より1時間余りデパート前の交差点周辺で行った。A3二つ折り(4面)のビラ1,000枚を用意し、約3分の2を手渡した。マスコミ取材なし。

元警察関係者らしき人がやってきて、メンバーの一人に「体制上、冤罪はいくらでも起こる」などと熱心に話をしていた、という出来事もあった。その他では、「それだけの悪いことをした人間は死刑になって当たり前じゃ」と息巻いていった年輩男性が一人いた。

(フォーラムひろしま・猪原薫)

#### 福岡から

「死刑の執行を絶対にさせないぞ」と全国一斉のビラ撒きに、ボくら福岡の死刑廃止・タンポポの会も参加しました。12月10日、天神のどまん中で、マイクを持ち道ゆく人々に国家が人間の命を奪う死刑制度の不当性を強く訴えました。もう、これ以上一人の命も死刑によってボクたちは奪われたるありません。死刑の執行を止める一日一日が、死刑制度廃止への長くて遠い道のりなのです。その一歩を全国の仲間と共に歩めた一日でした。

#### 北九州から

19年ぶりの死刑執行無しで迎えた年が始まりました。

大阪合宿の皆さんの熱い思いを受けて、ドキドキしながら12月10日



の全国一斉ビラ撒きをしますと手を挙げました。

後日、今頃余り見ないよね!なんて言われましたが、初めてタスキを作りました。

でもお陰で内容を察して向こうから手を伸べて受け取ってくださる方もありました。やれてとても嬉しかったです。

長く死刑廃止の為にがんばってくださった皆さんのお陰です、ありがとうございました。

(北九州 みかみさちこ)

(この他、大阪、高知、水俣などでおこなわれました。)

# 「死刑廃止についての議論を開始し、死刑執行の停止を求める緊急アピール」発表について

NPO 法人監獄人権センター事務局・松浦亮輔

2011年12月13日に識者13名による「死刑廃止についての議論を開始し、死刑執行の停止を求める緊急アピール」を発表し、法務大臣、内閣官房長官、主要各党へ送付しました。

緊急アピールは、絞首刑の残虐性が問われた事件が、市民が初めて死刑の合憲性判断に関与した事案として注目を浴び、死刑制度の是非に関する議論を求める声が高まり、死刑制度について問題意識が芽生えるまでになってきている状況を踏まえて、国会での死刑制度に関する徹底した議論、調査の開始を求めています。また、同時に冷静に議論・調査を行う環境を確保するため、少なくとも議論が行われている間、死刑の執行は停止される必要についても述べています。

緊急アピールの発表にあたり、参議院議員会館にて、翻訳家の池田香代子さん、映画監督・作家の森達也さん、裁判員経験者の田口真義さんに御参加いただき発表記者会見を行いました。記者会見には、毎日新聞、朝日新聞、読売新聞、共同通信、NHK、市民メディアのIWJの出席がありました。この緊急アピールは、雨宮処凛さん、池田香代子さん、池田浩士さん、太田昌国さん、香山リカさん、川村湊さん、木谷明さん、坂上香さん、新谷のり子さん、田口真義さん、土井香苗さん、中山千夏さん、森達也さんの連名によるもので、取りまとめをアムネスティ、フォーラム90のご協力を得て、監獄人権センターにて行いました。

○当日の様子は動画が閲覧可能 (IWJ 撮影・提供)

<http://www.ustream.tv/recorded/19116314>

音声が届き取りにくくなっている場合は、イヤホン等を用いて大きめの音量で再生してください。



## 【資料】

### 死刑廃止についての議論を開始し、死刑執行の停止を求める緊急アピール

いま、日本の社会では、かつてないほど死刑をめぐる議論が盛んになっています。

千葉景子法務大臣（当時）による死刑執行と、それに続く東京拘置所の刑場公開は、世界の耳目を集めました。裁判員裁判における死刑判決はいずれもマスコミで大きく取り上げられてきました。とりわけ、絞首刑の残虐性が正面から問われた事件は、市民が初めて死刑の合憲性判断に関与した事案として注目を浴び、同事件を契機として、朝日新聞（11月4日付）、西日本新聞（11月11日付）、信濃毎日新聞（11月2日付）、愛媛新聞（11月3日付）、茨城新聞（11月13日付）等の社説でも取り上げられるなど、死刑制度の是非に関する議論の開始を求める声が高まりました。

足利事件・布川事件と、相次ぐ無期刑受刑者に対する再審無罪判決は、過去の死刑判決に対する疑問をも生み出しています。さらに、オウム真理教関連事件で起訴された13名の元教団幹部らに対する死刑判決の確定を受け、今後の死刑執行の是非をめぐるのは、様々な意見が飛び交っています。

2011年の終わりを目前に控えた現在、死刑の執行が準備されているといわれています。しかし、果たしてそれでよいのでしょうか。死刑制度をめぐるのは、長い間、内外から様々な問題点が指摘されてきました。それらの一端が、今日、ようやく人々の目に触れ、問題意識が芽生えるまでになってきたのです。こうした状況において、私たちの社会が選択すべきなのは、死刑の執行を急ぐことではありません。今こそ、国会において、死刑制度に関する徹底した議論と調査が開始されるべき時です。そして、冷静に議論・調査を行う環境を確保するため、少なくとも議論が行われている間、死刑の執行は停止される必要があります。

死刑は、人間の生命を奪う究極の刑罰です。政治における党派の利害対立を超え、真摯かつ冷静な議論がすみやかに開始されることを、求めます。

2011年12月13日

雨宮処凛（作家）、池田香代子（翻訳家）、池田浩士（京都大学名誉教授）、太田昌国（評論家）、香山リカ（精神科医）、川村湊（文芸評論家）、木谷明（元裁判官、法政大学教授）、坂上香（津田塾大学教員、ドキュメンタリー映像作家）、新谷のり子（歌手）、田口真義（裁判員経験者）、土井香苗（ヒューマン・ライツ・ウォッチ日本代表）、中山千夏（作家）、森達也（映画監督、作家）（50音順）

## 死刑映画週間

# “「死刑の映画」は「命の映画」だ”

昨年2011年は日本で死刑執行が19年ぶりにありませんでした。そのことの意義は、はかり知れないほど大きいと思います。平岡法相は1年間執行が無かったことは大した意味はないのだ、といった発言を記者会見でしました。わざわざそう言わざるを得ないほどに大きなことでもあったわけです。特に私たち死刑制度廃止の実現を目指す者にとっては、死刑執行ゼロ年であったことを、大きな意味にしていかなければいけません。死刑執行を阻止し、死刑執行ゼロ年を続けていくことが、死刑廃止への一つの道です。逆に死刑存置を掲げる人や法務省にとっては、何とか死刑執行をさせようと動き始めることは間違いありません。今回の死刑映画週間“「死刑の映画」は「命の映画」だ”を企画実現しようとしたのは、そのような動きに対抗する私たち側からの運動の一環でもあります。この死刑映画週間を成功裏に終わらせることは、今年も死刑執行をさせない年にするために、死刑について多くの論議の場を作るその第一歩になるに違いありません。

昨年3.11を経験した私たちは、生きることの儚さや死んでいった人たちの無念さを痛いほどに感じました。ひとりひとりの命の尊さをこれほどに思わせる年は、戦後六十数年ありませんでした。大地震、大津波、原発事故が与えた衝撃はまだまだ癒えてはいません。癒えていないどころか被害は当分の間続いていくことでしょう。これから何年経てもこの大震災の記憶が消えることはありません。この大震災は、私たちが“命”について深く考える機会となりました。私たちひとりひとりには、命は一つしかないのだという事を思い知らせてくれました。奪われた命は二度と帰ってこないのだという事を、夥しい犠牲者たちは私たちに告げています。そのひとり一つしかない命を、死刑制度は無理矢理に奪い取っていくのです。しかも天災ではなく、国家の名のもとに奪い取るのです。このことは今回の死刑映画週間に“「死刑の映画」は「命の映画」だ”と名付けた理由でもあります。私たちが昨年行った死刑確定者の人たちへのアンケートに「東北地方太平洋沖地震にて、死者1万5000人以上、行方不明7000人以上、そして避難されている方が11万人以上であり、被災

地で生活している方々がいまだに不自由で苦難な生活をしているなかで、私は死刑確定者という身分でありながら、毎日3食も食事をいただき、入浴もさせていただいています。(中略)申し訳ありません」と答えてきた人がいました。いつ死刑執行をされるかわからない死刑確定者の人が、この未曾有の災害による被害者たちの前に言葉を失っていました。しかし死刑制度というのはこのように答えた死刑囚の命を、有無を言わずに奪い取っていく制度です。命がひとり一つしかないのは誰にとっても同じです。死刑囚であろうとそのことは変わりません。人の命に軽重のあろうはずがありません。

今回の死刑映画週間“「死刑の映画」は「命の映画」だ”は、死刑に関係する映画を10本集めて上映します。詳しくは7頁に掲載された番組表をご覧くださいなのですが、1週間の上映期間中毎日日替わりでゲストトークが開催されます。これは画期的なことであろうと思います。死刑に特化された映画祭も過去なかったと思いますが、それだけではなくゲストの人が、死刑と映画についての話をするのも今までにはない試みです。トークゲストは、映画監督(吉田喜重・足立正生)、原作者(小嵐九八郎)、精神科医(香山リカ)、評論家(佐藤優)、作家(雨宮処凛・森達也)といろいろな立場の人であり、その人たちが死刑と映画について話してくれる内容は、行き詰まった現状を切り開くものになるのではないのでしょうか。これらの映画とトークは、私たちが死刑廃止運動の次のステージへと向かわせるスプリングボードとなるに違いありません。多くのメディアに取り上げてもらい、口コミで広げて、ソーシャルネットワークで燎原の火のように燃えあがり、数多くの人にこの映画祭のことを知ってもらいたいと思います。そしてひとりでも多くの人たちに映画館に来場してもらいたい。そのことが死刑制度について語り合う場を増やすこととなります。結果として今年も死刑執行ゼロへ向かう大きな原動力になるはずです。ひとりでも多くの人に映画館に足を運んでもらうようにしましょう。(可知亮)

◆ユーロスペース販売窓口で「フォーラム90の会員です」と言うと、1100円に割引になります。

# 死刑映画週間「死刑の映画」は「命の映画」だ

## A 私たちの幸せな時間



2月4日(土) 11:00  
2月6日(月) 18:15  
2月9日(木) 16:10

監督=ソン・ヘソン

2006年/韓国映画/124分/原作=コン・ジョン(日本語訳=蓮池薫)/脚本=ジョン・ミンソク/音楽=イ・ジュシ/主演=カン・ドンウォン、イ・ナヨン

【物語】自殺未遂を繰り返すジョンは、ある日シスターである叔母に連れられ死刑囚ユンスと面会をする。死刑囚の男と自殺願望の女。人生の果てに訪れた、最後の「幸せな時間」

## B 真幸くあらば



2月4日(土) 13:20  
2月8日(水) 16:00  
2月9日(木) 18:45

©2009「真幸くあらば」製作委員会  
監督=御徒町嵐

2010年/日本映画/91分/原作=小嵐九八郎/脚本=高山由紀子/音楽=森山直太郎/出演=尾野真千子、久保田将至、ミッキー・カーチス、佐野史郎、大久保嘉

【物語】死刑判決を受けた淳は、執行を待つだけとなった。淳に殺された男性の婚約者茜が面会に来る。触れあうことも許されない死刑囚との密やかな恋を描く、珠玉の純愛映画。

## C エロス+虐殺



2月4日(土) 15:10  
2月10日(金) 13:20

監督=吉田喜重

1970年/日本映画/167分/脚本=山田正弘、吉田喜重/撮影=長谷川元吉/音楽=一柳慧/出演=岡田茉莉子、細川俊之、高橋悦史、楠侑子、稲野和子、八木昌子

【物語】大逆事件の死刑を免れた大杉栄と伊藤野枝をめぐるエロスと虐殺が描かれる。1960年代と1910年代が錯綜しながら、国家とは何か、恋愛とは何かが、美的映像で描かれる。

## D 帝銀事件 死刑囚



2月4日(土) 18:50  
2月6日(月) 15:30  
2月8日(水) 13:45

©日活  
監督=熊井啓

1964年/日本映画/108分/脚本=熊井啓/撮影=岩佐一泉/音楽=伊福部昭/出演=信欣三、高野由美、鈴木瑞穂、内藤武敏、笹森礼子

【物語】死刑囚平沢貞通が無罪であることを証明するため、真実を追ったドキュメンタリー風劇映画。熊井監督の初作品であり、熊井自ら仙台拘留所で平沢に取材し脚本化している。

## E BOX袴田事件 命とは



2月5日(日) 11:00  
2月7日(火) 15:40  
2月10日(金) 18:15

監督=高橋伴明

2010年/日本映画/117分/脚本=夏井辰徳/撮影=林淳一郎/音楽=林祐介/出演=萩原聖人、新井浩文、石橋凌、村野武範、ダンカン、葉月里緒奈

【物語】1966年に起きた袴田事件に死刑を宣告した元裁判官・熊本典道の視点から描く。裁判員制度の今、無実の死刑囚をいったいどうするのだ、と私たち観客に鋭く問う作品。

## F 絞死刑



2月5日(火) 13:20  
2月7日(火) 18:15  
2月9日(木) 11:00

監督=大島渚

1968年/日本映画/117分/脚本=田村孟、佐々木守、深尾道典、大島渚/撮影=吉岡康弘/音楽=林光/出演=尹隆道、佐藤慶、渡辺文雄、戸浦六宏、足立正生、小山明子

【物語】在日朝鮮人死刑囚Rは絞首刑にされるが失敗してしまう。Rを再執行するために右往左往する刑務官たち。死刑制度と死刑執行の矛盾をついた60年代大島渚映画の一点。

## G サルバドールの朝



2月5日(日) 15:40  
2月7日(火) 11:00  
2月9日(木) 13:30

監督=マヌエル・ウエルガ

2006年/スペイン映画/134分/脚本=ルイス・アルカラーソ/音楽=ルイス・チャック/出演=ダニエル・ブリュール、トリスタン・ウヨア、レオナルド・スバラグリア

【物語】1970年代フランコ政権下、反体制活動で警官を射殺した罪で死刑判決を受けた青年サルバドールの執行までを、実際の経緯に即して描く。鉄環絞首刑で処刑された。

## H ダンサー・イン・ザ・ダーク



2月5日(日) 18:40  
2月8日(水) 11:00

©ZENTROPA ENTERTAINMENTS4 TRUST  
FILM SVENSKA/LEBERATOR  
監督=ラース・フォン・トリアー

2000年/デンマーク映画/140分/脚本=ラース・フォン・トリアー/音楽=ビョーク/出演=ビョーク、カトリーヌ・ドヌーブ、デビッド・モース

【物語】アメリカのある町でチェコ移民であるセルマが、息子のために間違っって男を殺してしまい、死刑になるまでを描くミュージカル映画。カンヌ映画祭パルムドール受賞作品。

## I ライファーズ



2月6日(月) 11:00  
2月7日(火) 13:45  
2月10日(金) 16:30

監督=坂上香

2004年/日本映画/91分/ドキュメンタリー

【内容】300万人を超える受刑者がいるアメリカ合衆国。その中に10万人あまりのライファーズ(Lifers)=終身刑 or 無期懲役刑の受刑者がいる。犯罪者更生のプログラム「AMITY」アミティに参加しているライファーズを追う。

## J 休暇



2月6日(月) 13:00  
2月8日(水) 18:15  
2月10日(金) 11:00

監督=門井肇

2008年/日本映画/115分/原作=吉村昭/脚本=佐向大/撮影=沖村志宏/音楽=延近輝之/出演=小林薫、西島秀俊、大塚寧々、大杉蓮、柏原収史、宇都秀星

【物語】死刑執行に立会う代わりに1週間の休暇を得た平井刑務官。執行された死刑囚は絵の上手な模範囚だった。執行後、女性とその連れ子とともに新婚旅行に出るのだが…。

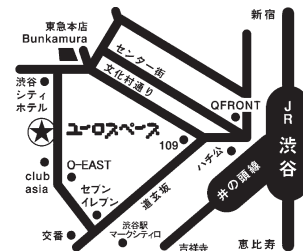
協力: 松竹/アミューズソフトエンタテインメント/大島渚プロダクション/カルチャー・コンビニエンス・クラブ/現代映画社/松竹/スローラーナー/東北新社/日活/リトルバード

### 入場料金

一般 1,500円 / 大学・専門学校生 1,300円 / 会員・シニア 1,100円  
前売券 1回券 1,000円 / 3回券 2,800円 / 5回券 4,500円 (劇場窓口でのみ販売)

# ユーロスペース

渋谷区円山町1-5 (渋谷・文化村前交差点左折)  
TEL. 03-3461-0211  
<http://www.eurospace.co.jp/>



誤植訂正・絞死刑上映日2月5日は日曜です

---

# 死刑はそれでも必要なのか

## 3・11の奈落からかんがえる

### 辺見庸

---

皆さん、いま、なにをお考えでしょうか。どんなふうに過ごしておられるでしょうか。あの日以来、僕はなにかむなしくて悲しいです。人がたくさん死んだということもあります。知人、友人も亡くなり、故郷の生まれ育ったところがなくなってしまったということもあります。しかし、それだけがつらいのではない。もっと深いところで、とてつもなく悲しいことがある。それが何か、ずっとぐずぐずと、この春からいままで、いまも考えております。今日差し当たりの言葉にできることを、何とか皆さんの前で吐きだしてみたいと思っています。

#### なにが悲しいのか

なにが悲しいのか。なにが辛いのか。かつ、なにかに僕は怒っています。2011年3月11日に一体何が起きたのか。実のところ、それが誰にもわかっていない。テレビや新聞は数字と数値、あるいは数多くの美談を流しつづけました。これを僕は「ナショナル・ヒストリー」と仮に名づけたいと思っています。メディアがつくった国民の記憶、物語です。それには、危機の本当の深さや、意味を、さらには、私たちの本当の魂の居場所を教える言葉がないと思います。それが、つらさ、悲しさの原因ではないかと思っています。僕らが欲しているのは、ナショナル・ヒストリーではない。本当に危機の深さと意味を語ろうとする何かが必要であると私は思っています。この度の出来事、「3・11」は私一個の小さな浅い内面にはとうてい収まりきれない、大きさ、深さと、強度と、性質とを持つのではないかと考えます。人間の想像力や表現能力を超える無限の時間性、無限の波及性をもつのではないか。その直観と、私が毎日目にし耳にしている言葉や映像があまりにも乖離している。さっぱり私の胸の奥に差し込んでこない。そのことに苛立つ。で、虚しさを覚えるのです。

#### 深い言葉を

もちろん、起きてしまったことは、もとはに戻しようがない。しかしながら、まるでいつかまたもとに戻るかのごとき言葉、言説、あるいは詩と映像が溢れています。そのことにやり場のない苛

立ちを私はおぼえるのです。言葉はすでに瓦礫の中に捨てられていると私は思います。もし、これから私が申し上げるような言葉が身近で語られて、こういう言葉に耳を傾け、読み込もうとする意思がある社会であるならば、何か私の心の奥に差し込むものがあつたのではないかというふうには私は思うのです。それは、こういう言葉であります。

「すべてを変容させるものがゆっくりと／摺り足で／わたしのあとから降りてきた」(『迫る光』『貝塚』) または、

「狂気への道をたどりゆく者の眼…そのなかに／他の眼差しはすべて流れこむ。／ただ一度の／潮が／満ちる。／やがてこの眼は／岩を輝かせて死にいたらしめるだろう、あのものたちが／ころならずも／のりうつらなければならなかった／あの岩を。」(「狂気への道をたどりゆく者の眼」)

すべてを変容させるもの。狂気への道をたどりゆく者の眼。そのなかに、他の眼差しはすべて流れ込む。こうした言葉ならば、まだしも腑に落ちます。

今ご紹介した言葉は、パウル・ツェラン(1920—1970年)という詩人の詩であります。ツェランはむろん、3・11について語ったわけではなく、ファシズムについて言っているのだと思います。しかし僕は、この言葉の芯、言葉の底力、言葉の喚起力、これを感じないわけにはいかなのです。いつかもとに戻るとのことよりも、この危機の深さというものが、伝えられている以上のものなのだということを、体の芯で感じることのほうが、私は大事だと思っています。

#### 思念の原点

すべて生あるものの与件として死があり、形あるものの与件として崩壊がある。すべての開始されたものの与件として終わりがある。この死と終わりの風景が、3・11以来、私は剥きだされたと思っております。それを、なぜ見えなくする必要があるのか。死の風景を凝視して思いをこらすことはいけないのか——と私は考えています。死と終わりの風景がまるでなかったかのように、3・11以前の言葉と文法があてがわれ、3・11以前の常識で真っ暗な陥没部分が埋められつつある。そこに



私は違和感を感じます。これだけの破壊と、これだけの人命を失い、これだけ我々の内面が壊されたならば、ここで思念の原点に立ち戻らなくてはならないのではないかと思います。少なくとも私という内面は、この春の大衝撃で、言ってみれば一回コンピューターのように初期化されたようにさえ感じております。

### 「おもえ！」

大震災以来、私はしばしば故郷を想います。私の体の奥に、芯のように、鉄棒のように、入っている記憶があるからです。学校の教師です。怖さと高潔さを併せ持った男でした。みんなに恐れられていました。高橋という中学の恩師でした。その人は、いつも皆から離れて立っていました。朝礼のときの印象が非常に強いのですけれども、一列に先生たちが間に立つ時、彼はいつもその一列のところからずれて立つわけです。人の群れからいつも離れて立つ。高橋という先生が歩く時の、あるいは立つ時の、その微妙な位置と空気を私は忘れることができません。身を置く場が、群れのただなかにあっても、群れに同化してはいない。そのことなんです。それがずっと私の心の中に、冷えたまたは熱い鉄棒のように残されてしまった。群れから離れて立つという癖は、私はたぶんこの高橋という先生から受け継いだのではないかと感じております。この高橋先生の一筋の声は、私の体の中にまだ残っております。何かをめぐって先生がクラス討論をさせようとしたところ、生徒たちがみんなボーッと口を半開きにして、中には寝ている子もいたりする。そのことに先生は怒ったのでしょうか。ものすごい声で、教室の窓ガラスが割れるような、ヒビが入るほどの大声で、突然「おもえ！」と絶叫したわけです。この言葉が半世紀後の現在も私は忘れることのできないのです。「おもえ！」。

「おもえ」—どう書くのでしょうか。「思え」と書くのか、あるいは「想え」と書くのか。半世紀、私はこれを頭の中で、うんといじくったり、ときには封印してみたりもしました。「おもえ」とは、ひょっとしたら「思惟」ということではないか。あるいは、もっと予感しろ、感じろということでしょうか。ただ、この先生が言う限りにおいてそれは、独りでやれ、衆を頼むな、自分の頭で考えろ、自分の言葉にしろ——ということだったような気がいたします。

### 原真理

独りで立つ、離れて立つ、独りでおもえ——ということ、ずっと考えてきました。ここまで



(撮影・大島俊一)

病んでも、老いても、なおこの考えにとらわれています。そこで少し思い至ったことがあるのです。この「おもえ」に関連して、これはひょっとして、哲学の第一真理というやつではないかと長じてから思ったのです。法律や人権以前の、私の言葉で言えば「原真理」というやつです。一切の事物とその存在の自明性というものを疑った末にやっとなどついた、人として絶対的に否定することの不可能な、ものごとの始まり、始点であります。それが第一真理、ラテン語でいう「コギト(Cogito)」ということではないかと思うのです。そのことに、私はこの度の震災以降、とてもこだわりました。虚栄も見栄も銜いも、虚勢もすべてはぎ取った末に残る、原真理、第一真理とは、「おもえ」ことではないかと考えるわけです。テレビや新聞や権威ある者からの押しつけからではない。自分の頭で思うことではないかと私は思うのです。みんなと一緒に行動し、他と一緒に歌い、踊ってナショナル・ヒストリーをつくる必要はまったくないと思うのです。

3・11を経験した私は、今その始点、原真理、思うことに立ち戻らないといけないと思っているわけです。コギト、私が思うこと。それは、良民、金持ち、知識人、善人、教養人、健常者だけに許されている真理ではない。悪人、貧乏人、障害者、人でなし、ろくでなし、人殺し、レイピスト、ごろつき、強盗にも許される。予め、そして最後まで、死ぬまで私どもにもたされた原真理、それがコギトではないかというふうに私は思うわけです。

### 思わないもの=死体

それから、こうも考えました。これは私が脳出血やがんに倒れ、死に目に遭った時に思ったことでもありますけれども、〈人というのは、死ぬまでには生きるほかない〉また、〈生きる限りは思うほか

ない。どんなに愚劣なことであれ、どんなにつまらないことであれ、生きる限り思うほかない」ということです。

やはり大震災のあとは、人間の、私自身と他者の生と死の問題を、ふだんよりはもっと集中的に考えたのです。コギトを支えるもの、「我思う」を保障するもの、それは何なのか。それはまず、生きているということです。思う主体である私が生きている、ということであります。そういうふう

に思いつつ、次のことを思いました。私がよく見知った三陸の浜辺に、夜半に打ち上げられたたくさんの死体があります。それをテレビは知っていて映しません。想像するほかない。なぜ映さないのか、なぜ深く描かないのか。私は不満です。それらは首のない死体であったり、手足や眼球を失くした死体であったり、あるいは、まだまるで生きて微笑んでいるような死体もある。ラテン語由来の英語で「CORPSE」という言葉があります。それは「死体」という意味です。コープス。中身のない、脱け殻のことを言うわけです。欧米にも人魂というものがあるらしくて、人魂—CORPSE CANDLE と言う。「コープスキャンドル」ないしは「コープスライト」と言います。換言すれば、「思わないもの」、これが死体であります。もっと言えば、コギトしない、言葉を奪われたものではないか。しかし、言葉を奪われたものが死、死体であるとすれば、生きた死体というのもあり得るのではないかとこのように、私は思うのです。つまり、何も思わないものは、死体になぞらえていいのではないか。高橋先生は、「おもえ！」と叫ぶことによって、くおもえら生きた死体になるんじゃないよ」と論じたかったのかなと、今この歳になって、やっと私は想到したわけです。あの彼の最も単純な命令形「おもえ！」は、私がおもえに学んだどれほど複雑なテキストよりも素敵な、生きた言葉でした。

### 3・11 とは何か

3月11日は何だったのかということ、よく考えます。今まで縷々お話ししました通り、3・11というのは、多くの事物を否定し、破壊しました。第一にコギト(Cogito)、我思う、エルゴ・スム(ergo sum)、だから私があるんだという原理を破壊しました。これが第一であります。第二に、モノ全般、構造物、既成の造形、構造物をなぎ倒し、破壊しました。それはとりもなおさず、今までの芸術、思想、宗教、神、人的能力、科学技術というものの全般的な崩壊だと言ってもいいのではないかと思います。近・現代が終わっているのではないかと——そういう直観を私は以前から持っていたのですが、3・11はつまり、時代を画する、画時代的な災厄ではなかったかというふうに思うので

す。第三に、「現代」「今」という芝居の書き割りのな時空間というものが、あっけなくめくり返されました。ボードリヤールが言うシュミラクル(模擬とか模造とか幻影ということですが)だけが、独り歩きして、我々が本当のリアリティーというものをずっと失っていたということを思い知らされた、と私は思うのです。数々の映像を見て、僕はこう思うのです。画面から津波が押し寄せてくるように、幻影を打ち破ってくる。ヴァーチャルではないリアルとはこういうことなのだと教えてくれているような気がするわけです。それは逆に言えば、今まで、3・11までに我々に最も欠如していたものは何であったか、ということを見せてくれているとも思うのです。

それは何でしょうか。皆さんの反発を買うかもしれないけれども、3・11のあとに津波によって壊され、流され、また押し寄せられてきたモノたちの安っぽいこと。車、家、ペラペラしたものたち。あれにずっと我々はこだわってきた。それに憑依してきたわけであります。それは、シュミラクルであると思うのです。人はそういうものを自分の仲間として使用しながら生きてきたのだということがわかりました。つまり、我々に最も欠如していたのは現実だったというふうに私は考えざるを得ないのです。

### 3・11 と死刑

第四、これが最後ですけれども、我々の生活から、時間的な連続性が奪われた、ということでもあります。私は皆さんに、来年、再来年のこと、または今年のこと、何を約束できるでしょうか。皆さんは私に何を約束できるでしょうか。それはもう難しくなったと言っていると思うのです。そのような約束、明日は今日の続き、明後日は明日の続き、今日は昨日の続きという連続性がすでに内面で断たれている。この事実とはとても大事なことだと思います。今言った四つの3・11の特徴のうちで、第一のコギト、「私は思う」のだということの、そのコギトの否定という問題について、今日はもう少し踏み込んで喋らなくていけません。第一の真理、原真理を否定されたら人は立つ瀬がない。思うことを許さないこと、これは実に困る。抵抗しなければいけない。人間存在の根源にかかわるからです。ここから私はもっと敷衍して考えてみたいと思うのです。

今、原発ではなくて死刑を語ることは、わざわざマイナーなテーマを選んでいるかのようですが、私にとってはそうではありません。3・11のショックがまだ癒えないこの夏、裁判員裁判で三人を殺害した人物に死刑判決が下りました。三人を殺した人間はほとんど自動的にこの国では死刑にされてしまう。ただ、ここでも私は思わざるをえま

せんでした。夥しい死そして喪失のただなかでも、なおも死刑判決をするのかと私は胸をつかれたわけです。死刑判決には、そして死刑執行には、いつも愕然とし目眩がするわけですが、今回はとりわけ激しい違和感を感じました。そして怒りを感じました。まだ始まったばかりの裁判員裁判で、早くも六例目の死刑判決が出たのです。裁判員裁判は、世間の感情というものをバックにして、世情を背負わされて死刑を乱発するであろうとこわごわ予想していたら、やっぱりそうでした。被告人が控訴を取り下げ、裁判員裁判では二例目の死刑が確定しました。何か私は、このことにも異様な感じを受けたわけです。これほどの夥しい死というものを生み出している、そのただなかで、人に対して死刑の判決を下すということはどういうことなのか。それを、自分の思考というカメラをずっと後ろに引いて、考えざるを得なかったわけです。こういう質問を自分にしたのです。よしんば法理論上死刑判決が可能で適法であるにせよ、明日人類が減びるかもしれないという時に死刑判決を下したり死刑を執行するというのは、根源の人間の哲学にとって英明なのか、それともとんでもなく愚劣なことなのか。果たしてどちらでしょうか。これは、例外状態、あるいは緊急事態ということと、どこかで関わり合いがあるのではないかとも思います。例えば戦争、内戦、あるいは大災害という場合、死刑は控えられるかという、歴史的には逆なわけです。人はもっと暴力化する。私は考えて考えて、考えた末に思います。死刑は愚劣だと思ふのです。最も愚劣である。これは「思わない人間」のやることだと思ふのです。

### 千葉景子さんのこと

今、確定死刑囚は、戦後最多と言われています。総じてマスコミは、まるで121人という絞首刑をしていない人間たちがいるということが我々の生活上何かとんでもない支障があるかのように、「早く執行しろ」というような報道をする。それは私は違うのではないかと思います。

本当のことを言うと、福島原発のメルトダウンは非常にこわい。まさに世界史的事故であり、事件です。でも同時に、あるいはときとしてそれ以上に私が恐れているもの、それは、まだ見たこともない、気付かざるファシズムがこれからくることです。そして、ファシズムは死刑廃止運動の中からだってひょっとしたら容易に生じてくるかもしれません。人がものを考える—今日は会場の廊下にたくさん、死刑囚の皆さんたちの作品が置いてありますけれども一人がものを思う、創作したり考えたりする、それを絞首刑で断つということを私たちは絶対にやってはならないし、我々が万が一、法務大臣になることがあっても、死刑は

やらないでしょう。やらないとたかをくくっている。法相でない我々は皆そう思っている。しかし、あの千葉景子さんはやりました。やったのです。かつて死刑反対の立場にいて高らかに正義を語ってきた人物がやったのです。千葉さんがやるとは、我々は誰も思っていなかった。私も想像だにしませんでした。千葉景子法相の命令による死刑執行は、戦後司法史のみならず戦後思想史上、戦後市民運動史上の重大事件であると私は思っております。

しかしながら、この問題はまだ少しも解明されていません。深い内省もまだされていないように思われます。すなわち、千葉さんはなぜ死刑執行を命じたのか、その真の理由、動機、死刑執行正当化の論拠、思想変節の経緯、彼女の心の裏側、千葉さんという存在を支持し肯定してきた側になにも問題や責任はないのか…といった点がもっと検討されてよいのではないのでしょうか。また、千葉さんという一人物にすべての責任を負わせて問題を終わりにするのではなく、次のような設問をすることも無駄ではないと私は考えます。すなわち、〈私のなかの千葉さん〉の可能性はありやなしやという設問です。ありえない。そう皆さんは言うでしょう。しかし、自分のなかに本当に千葉さんは棲んでいないのか、闇に目を凝らすように独り自省するのはけっして意味のないことではないと思います。この国最後の死刑執行（最後であることを私は切に望みます）は、かつて死刑反対のがわにいた人物によって命令されたという冷厳な事実を、私は肝に銘じております。

そのことと視えないファシズムの問題は無関係ではないと考えます。戦後民主主義がたかをくくってきた「悪い芽」がいま、とりわけ3・11後、大阪をはじめあちこちで手がつけられないほど伸張しています。

### イナーシア

阪神大震災の日に神戸のある男性は、返却期限が切れるレンタルビデオを返しに行ったそうです。約束は守らなければいけない。焼け野原をとほと歩いていった。それを僕は聞きながら笑ったけれども、次に唇が凍えるような思いをしました。それはなぜかと言うと、歴史の一大転換点であっても、その前のイナーシア（慣性）で動いてしまう、その恐ろしさ、滑稽さを想ったからであります。3・11が起きたにもかかわらず、人の生、人の死というものをより深く肅然と考えるということよりも、前のルーティンワークを持ち出して、その通りに動く。それを心の、精神の慣性の法則、イナーシアではないかと私は思うのです。現在も、それがあるといふふうに思っています。

昨日来た不思議な電話のことについて、私は敢

えて言いたいと思います。今日私がここで講演をするということをネットかなにかで知った方なのでしょう。押し潰したような声で、「大震災と死刑の問題を結びつけるのは死者に対する冒瀆だぞ」と、これだけです。言外に、お前は講演をやるべきではないと脅したつもりなのでしょう。講演タイトルから内容を察知して恫喝しているような感じで、ゾッとしたのです。この国の古くからの死刑制度に非常になじむ情念のようなものが、今もまたむき出してきている。つまり、死刑囚＝けがらわしい者たち、大震災ないしは戦争の死者＝神聖な者たち、というふうな区別です。いわゆる「けがらわしい者」と神聖な者を結びつけることをタブー破りだとする。洗神一神を穢す行為だとして激しく反発する。こういうセンチメントが、今、この国にあると思うのです。こうやって大方の皆さんが死刑に対して疑問を持っておられる集まりの中では、そういう空気がないわけだけれども、ここから一歩でも外に出れば違う。私は想起するわけです。確定死刑囚というのは、私も友人がいますけれども、ローマ時代のちょっと特殊な囚人、ホモ・サケルというのにどこか存在のさせられかたが似ている。ビオス (bios) と言いますが、社会的な、政治的な諸権利というものを奪われている。ゾーエー (zoe) と言いますが、生物学的な生しか与えられていない。「おもえ！」はここでは通用しない。思うこと自体、否定されている。彼らはただ生物体として生きているだけ。執行までの間をただの生物体として生かされているだけ。そういう状態に確定死刑囚というのは置かれているわけでありませう。

イタリアのアガンベンという思想家、哲学者は、そういう生のありようを、「むき出しの生」と言いました。あらゆる権利というものを奪われた、むき出しの生。私はこのことに興味を持っています。むき出しの生を、アガンベンは、ローマ時代の囚人に見ただけではないのです。実は今現在に見つあるわけです。私はその直観に強く賛成するのです。諸権利をすべて奪われた、古い言葉で言えば棄民のような存在。現実にいるではないですか、被災地に。拘置所にも。諸権利をあらかたはぎ取られた人たちがいる。そのことを何とも思わない社会、国家があるわけです。

### まず在らしめよ

私は最初からずっと言っている第一真理、我思う、思う我ということに立ち返りたいと思うのです。それは戦争や大震災のような例外状態、緊急事態にあっても可能なんです。究極的には我々が亡くなるまで、被災者にも、それから絞首刑を執行される直前までの死刑囚にも原真理はあるし、人が思い、そしてそのことによって存在すること

において、彼らには貴賤はないということなのです。貴賤があってはならないわけです。そのことを私は脅しの電話の中で反論することはできませんでした。黙って聞いていただけです。しかし、電話の意見は恐らく、皆さんよりももっと多数のこの国の声だ。この国の隠れたセンチメントであろう。あるいは、裁判員裁判の基底を支えるセンチメントではないかというふうにも私は思うわけです。しかし、思うこと、存在すること、そのことにおいて貴賤はない。したがって私が死刑の問題と3・11の問題を結びつけて語ることは何ら問題ではない。むしろ話さなければいけないというふうには、私は脅されながら思ったわけです。

まずもって人を在らしめよ。まずもって人を存在させよ、というふうには私は思うのです。人びとはすでにこんなにもたくさん死んだのです。であれば、ルーティンを守って、法律を守って、またすぐ明日にも、今にも地震がきてさらに数万の人が亡くなるかもしれないのに、死刑を執行することはない。まずもって人をして在らしめよ。生かしめよ。人を存在させる。生かせと私は思うのです。私は、こんな単純なことを考えるのに半年以上かかりました。もう少しお話ししたいと思います。

### 荒ぶる風景

中国にいる時に私は、日本語の達者な中国の偉い人に、「あなたは『へんみ』さんじゃなくて『へんけん』さんですね」と言われたことがあります。うまいこと言うなと思いました。日本でも多くの人は私を刃見ではなく偏見とおもっているようです。

さて、2008年にリーマン・ショックというのがありました。今はそれ以上の規模の世界同時株安のただなかにあります。ギリシャの債務危機、それがイタリア、スペインに波及している。市場経済の原理が、もう働かなくなっている。市場メカニズムが破綻している。近年、投機マネーというものが驚くべき肥大化をしている。マネーという虚、コンピューターで一瞬にして動かせる、その実体のない虚が、実体経済のほとんどを支配するようになってきた。それは市場の世界だけではない。我々の思考でもそうです。シミュラクルなわけです。幻影が、お金という記号が人を支配するようになった。世界規模で資本主義がいま、危機に瀕している。断末魔と言ってもいいと思う。それから、3・11から間もない5月に、あのビンラディンが殺害されました。それからややあって、ノルウェーで連続テロ事件というのが起きました。天変地異、尋常ならざる事件、災厄というものが連鎖している。かつて断じてあり得なかったはずのことが起きている。

「ついに来た」というふうには私は思うのです。こ

これから先は、私は辺見ではなくて「偏見」になるわけですが、荒ぶる神、荒ぶる風景というのが、これからもあるであろうというふうに直感するわけです。それをあえて強引に名づけるとすれば、「世界大崩壊時代」というものがきていると思うのです。我々はすでにそのただ中にいる。気候変動でもそうです。もうすでに日本という国は熱帯か亜熱帯みたいになっています。それプラス、大恐慌、デフォルトの連鎖、債務不履行の連鎖、破綻国家。つまり国家が溶けていくというふうに思うのです。すべてのシステムがダウンしつつある。テロが頻発する。「低強度戦争」、ローコストの戦争というものがいつでも日常化するであろう、いや、ローコスト戦争はいつも世界中で戦われている。それがはずみで大規模戦争化する可能性はいつでもある。それから核爆発の可能性もあるだろうと思います。

90年代の前半ですか、長いことヨーロッパを旅していたことがあるわけですが、その時に、50年後の世界というのを、たぶんイギリスのテレビだったと思いますけれども、大がかりな未来予測番組を見たことがあるのです。2040年ぐらいに、欧州・イギリスでは移民労働者や若い人たちの暴動が拡大し、失業者たちがイギリスの国会議事堂まで押し寄せて来る。警察や兵隊が軽機関銃でその暴徒たちを撃ち殺している。中国は、50年後には三分解して、北京政府と広東政府と上海政府で内戦状態にある。アメリカは大統領がヒスパニックになっていて、ホワイトハウスにペンペン草が生えている。アメリカは欧州諸国と一触即発の対立状態にある。日本は、中国から毎週押し寄せて来る難民を阻止するために、「水際作戦」と称して、海軍をものすごく増強して、軍国主義化しているのです。この未来予測を私は、当時身を乗り出すようにして見ていました。で、今思い返しているわけです。前倒しでやってきたなど。ただ、その中には原発メルトダウンはありませんでした。

### 「暗闇の陰影刻む初蚩」

この荒ぶる時代、大崩壊時代というものをどう生きるのかについても、この半年ほど考えました。日本にもいくつか参考になるテキストがあります。私も、ご多分にもれず『方丈記』を読みました。「行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたるためしなし」。暗誦するように読んでみました。日本中世には、安元の大火、治承の竜巻、養和の飢饉、元暦の地震というのが相次ぎました。末世の時代の心象を、『方丈記』は見事な日本語で書いたのです。面白いといえば面白い。一切のものが生滅、変化して常住ではない。それが日本の心性の基本でした。み

ずから闘いうちたてる「歴史」なき歴史観がこの国の特徴です。いわば「流れ」の歴史観です。オポチュニズムの淵源がこの国の歴史にはあります。みずから流れに身を任せていく非歴史的歴史。いまもそうです。『方丈記』を読み直してみても思ったのは、無常観と言われる、この心の持ちようというのは我々の累代の心性ではないかと思う。『方丈記』が教えているものは何かと言うと、我々には歴史がないんじゃないかということです。じゃ、何があるのでしょうか。流れです。流れ。流れに身を任せていく非歴史的な歴史がこの国にはある。自ら闘って打ち立てていく歴史はないのではないか、というふうに思うのです。

もうひとつ参考書と言うべきか、ある意味で傑作であり、「なんだ、この程度か」というふうにも思われる本で、堀田善衛さんの『方丈記私記』という本があります。これは『方丈記』という鎌倉期の随筆に、1945年、敗戦の年の3月10日に、東京大空襲で死者10万人が出る、3・11どころの騒ぎではないことを重ね合わせて、『方丈記』を読みながら彼が、そこに自分の記憶を重ねながら書いた随筆です。ただし、堀田さんがその仕事をやられたのは東京大空襲のさ中ではない。実時間に彼は発言したのではないにもかかわらず、私は今読んでもやはり大変に、学ぶべき箇所があると思いました。特に私がこの度注目したのは二つの点です。3・10と3・11と重ね合わせて皆さん聞いてほしいのですけれども、第一点に彼が3・10すなわち東京大空襲の時に感じたのは、日本の全てが破壊されて焼け落ちた末に、「平べったく」なった爽快感というのがないではなかった、ということでもあります。それと、「天皇から二等兵まで全部が全部、難民になってしまえば……」階級制度の全的な崩壊といった新しい未来が、東の間であれ、夢想されたというわけです。

「おもしれえなあ」というふうに思いました。僕がある通信社に入社したのが1970年、それから間もなくこの本を読んだのですけれども、その時には思わなかったのに、今回この指摘をぞくぞくするぐらい面白いと思ったのです。あれだけの理不尽な破壊のなかで、上から下まで、天皇から二等兵まで、みんな難民になってしまえば……。階級制度の全的な崩壊なんていう新しい未来を、東の間であれ、ふっと脳裏をかすめたというのですから。

それからもう一つ、これは極めて大事で、私はたぶんこれを言いに来たと思うのですけれども、『方丈記』における無常観を彼はあれこれと吟味しながら、この日本という国では、無常観、つまりはかなさを、政治利用していると言うわけです。これはとてつもなく重大な指摘だと思うのです。政治が利用する無常観というのを、堀田さんは「俗無常観」というふうに名づけるのです。戦争に利

用する。特攻隊に利用する。あるいは、あらゆることに対するアプリアナ諦観、これが全部無常観に通じる。これにずっと釘付けになって、このことを何度も何度も、繰り返し私は考えました。

私はかねがね、死刑制度というものの中には、日本の天皇制というものと、どこか抜きがたく非論理的な、情念上の関連があるのではないかというふうに睨んでおります。私は、この「無常観の政治化」が死刑制度を長期的に維持している、その底流にもあるのではないかと思うのです。はかなさ、人の命はどの道はかないというふうな考え方であります。そして、自らの体で歴史というものを立てるのではなくて、歴史に流されていくのに我々は馴染んでいく。体ごと馴染んできたのではないかと思うのです。

時間がもう差し迫っているのです。これで終わりにしますけれども、現在もまた新しい末世であり、末法の時代に来ていると感じます。「明日なき今」と言ってもいいと思う。それをやはり自覚的に生きざるを得ないというふうにするのです。それには、「おもえ！」というところに、つまり原点に結局私は戻るしかない。

「人は、生きていく間はひたすら生きるためのものなのであって、死ぬために生きていくのではない。なぜいったい、死が生の中軸でなければならないようなふうには政治はことを運ぶのか？」と、堀田善衛は書いている。私はこれについても本当にゾクッとしました。彼はこれを無常感の問題とともに提起したということは極めて重大だと思っているし、それ以降、これほどの洞察というのを私は読んだことがありません。死が生の中軸でなければならないような状態、これはまさに死刑制度そのものだとこのこととあります。死刑制度、それは政治という犯罪を

凝縮したものです。私はそれに根底から反対します。

時間が来たので最後一つだけ、私の友人が最近詠んだ俳句を紹介して終わりにします。彼は、こんな俳句を詠みました。「暗闇の陰影刻む初蜩」。暗闇を初蜩——今年初めての蜩が飛んでいる。一匹なのでしょう。7月3日に詠んだと記してあります。蜩の北限は岩手県か青森県だと聞きました。彼の頭の中では、福島県の蜩も想定したかもしれない。俳句というのは、つくる側だけではなく、我々読む側が最大限に想像力を働かせてなければいけません。もう一つ、福島県の放射能で汚された夜の蜩だった可能性もある。「暗闇の陰影刻む初蜩」。そう読むと恐ろしい俳句であるということがわかる。もっと恐ろしいことがある。これを詠んだ彼は、30数年間蜩なんか見てはいない。なぜか。彼は死刑囚だからです。見ない蜩をうたう。しかも今の蜩。2011年の夏の蜩は放射能に汚染された空を飛んでいるであろうということをやったわけ。彼は、病気で。彼は、コギト、思うことをしたのです。あやしい放射能に汚れた暗闇で、あたかも放射線の波動のように明滅する蜩。それを確定死刑囚の独居房で彼は想像したのです。なぜでしょうか。それは、生きていくからです。

こういうふうにするのを、思う人を、殺していいのでしょうか。殺す必要は、私はないと思う。これを最後にして今日のお話を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。〈了〉

(注) 本稿は昨年10月の講演テキスト要旨に辺見庸氏が加筆、修正したものです。この講演の全文は2012年3月に毎日新聞社から刊行予定の同氏の新聞に収載されます。

## 死刑日録

11月29日 最高裁第三小法廷(那須弘平裁判長)は兼岩幸男さんの上告棄却、死刑確定へ  
12月6日 長野地裁(高木順子裁判長)

は池田薫さんに死刑判決  
12月12日 最高裁第一小法廷(宮川光治裁判長)は松永太さんの上告棄却、死刑確定へ  
12月12日 最高裁第一小法廷(横田尤孝裁判長)は浜崎勝次さんの上

告棄却、死刑確定へ  
12月26日 東京高裁(八木正一裁判長)は小泉毅さんの控訴棄却、死刑判決  
12月27日 長野地裁(高木順子裁判長)は伊藤和史さんに死刑判決

### 【編集後記】

紙面の都合で記事に出来なかったことで、いくつか記しておかねばならぬ事がある。

一つはイタリアのピサから11月30日付けで平岡法相宛に170名6団体名でメッセージが送られたことだ。

「1786年11月30日、イタリアの一角にあったトスカーナ大公国は、世界に先駆けて、拷問と死刑を制度として禁止、廃止しました。200年以上も前のこの出来事は、美しい自然や芸術作品とともに、今日でもこの国の市民の間で語り継がれ、学校でも誇るべき歴史の1ページとして教えられています。わたしたちは、平岡法相にも、ぜひ、日本の未来の世代が歴史的な転機として思い起こし、誇りに思うような1ページの最初の行を記す法務大臣になって頂きたいと切に願っています。どうか、日本国内だけでなく、海の向こうにも、平岡法相の勇気ある闘いを注意深く見守り、衷心より応援している大勢の市民がいることを忘れずに、信念を貫いて下さい。」

世界が日本の死刑執行を注目しているのである。メッセージに署名し、送っていただいたイタリアの方々へ感謝したい。第二に12月6日付けで安田好弘弁護士の上告が棄却され、

罰金刑が確定したことだ。一審無罪判決を覆した高裁判決を支持したもので怒りを禁じ得ない。近日、報告集会が予定されている。なお、安田弁護団の一人、成田茂弁護士が『インパクション』183号に長文の総括を書いていたので読んでいただきたい。また安田弁護士を撮影した東海テレビ「死刑弁護人」が文化庁芸術祭・テレビドキュメンタリー部門の優秀賞を受賞した。春以降順次全国公開だそうです。

もう一つは本誌前号の墨塗り問題である。これまでも執行場の写真などが墨塗りの被害にあったが、今回は青木理さんの講演原稿中、藤波芳夫さんが車いすで執行された場面、福岡拘置所等が抹消した。いい加減にしておくれやす、だ。

そして最後に、12月、執行ゼロにすべくさまざまな行動をとっていたため、2月4日からの死刑映画週間の準備に出遅れてしまった。これを成功させ定例化していきたいと思っている。ぜひユーロスペースに足を運んでほしい。なお死刑廃止京都にんじんの会も4月に映画祭を準備している。

下版直前に平岡秀夫法相の退任、小川敏夫参議院議員法相内定と報道されている。確定した場合、執行しないように要請するのハガキを同封するので、発送していただきたい。(F)